時の貫首たりと雖も

(平成四年十月一日 No.63号、平成五年一月一日 No.64号
「正信会報」掲載に若干加筆)

廣 田 頼 道

一、はじめに

私は昭和四十六年から五十年迄の四年間、立正大学に通学する為に、池袋の法道院へ在勤させていただいた。

昭和四十六年といえば、妙信講問題、つまり、「正本堂国立戒壇論」の嵐が吹きあれた時代であります。

この問題を背景にして、教義の改悪が行なわれ、二十年もたった今尚、改められることなく放置されていることに対して、一つの問題提起と、信仰者全体が直視しなければいけないことと、自分自身の反省の為に、この文を書いた次第であります。

二、何が改悪か？

今手許に、二冊の

日達上人述 日興遺誠置文

(略解) 日有師化儀抄

富士学林

の本があります。黄色に変色した紙質の悪い方の本は、奥付が、

※昭和三十九年七月二十日印刷発行

と、なっています。これを①とします。

もう一つの紙質の良い方の本の奥付は、

※昭和四十七年七月二十日印刷発行

昭和五十三年六月一日 再版発行

と、なっています。これを②とします。

②は奥付の表現からいって、明らかに、初発行を昭和四十七年七月二十日であると主張しているわけでありま

す。しかし、現実には、①の昭和三十九年七月二十日に学林教科書として執筆されたものが一番はじめの出発なのであります。

③は、日付は昭和四十七年七月二十日であっても、よほど意図的かつ、急いで作製されたものなのか、最後の百十六頁に、

『日興上人の御遺誠置文二十六箇条と、この百二十一箇条は、正宗をして宗祖滅後六百七十八年（昭和二十四年）の今日まで、一毫の謗法すら、なからしめた指針であったのであります』

このように、結びとして書かれ、私の手許にはありま

せんが、この本の原稿の最初は、昭和三十四年に書かれたものであり、けっして、昭和四十七年七月二十日の印刷発行ではなく、実は改訂印刷発行日という表現でなければならぬという、子供でも分かるような馬脚が、明らかになって、語るに落ちていますのであります。

では何故、この様な自語相違をしても、昭和四十七年七月二十日を初発行に見せようとしたのでありましょ

三、改悪の背景にある妙信講問題（昭和四十七年）

そのことには、この時点（昭和四十七年）における、正本堂建立の教義解釈・妙信講処分の問題があるのであります。

妙信講処分のいきさつをここで細かに述べるのが本来の目的ではありませんが、昭和四十七年七月の前後のことだけを、流れとしてかいつまんで列挙したいと思えます。

○昭和四十七年四月十六日、妙信講は池田大作に、戒壇論の「公場対決」を希望する旨の書状を出した。

○同日、計算されていたかのように、日達上人の訓諭

『正本堂は一期弘法付嘱書並びに三大秘法抄の意義を含

む現時における事の戒壇なり。即ち正本堂は広宣流布の暁に本門寺の戒壇たるべき大殿堂なり。』
が、発せられた。

「正本堂イコール事の戒壇」

と、我が身、我が組織の貢献度、名誉心からも、どうしてもそうしたい池田創価学会と、宗門側は、全面的にそれは肯定出来ない乍も（池田創価学会主導の全体組織になってしまう）未曾有の発展と、ひょっとしたら、世界広布は池田学会のいう通りに出来るのではないかとこの夢想の中で、

「正本堂イコール未来の事の戒壇」

という、玉虫色の折中案で、その場をしのごうとしたわけでありませう。

（池田学会にも、日蓮正宗にも、一切衆生の成仏が広宣流布であるという、本来の広宣流布観はなく、世界中の人に、どういう形にせよ、御本尊を持たせ、御授戒さえ受けさせれば広宣流布だという、世界制圧、覇権主義的思想を持って広宣流布と考えているのであります。）

妙信講を使って、池田学会の慢心を押え、貫首のコントロール下に置き、妙信講にも、これだけ折中に努

力したということを理解させたいという線をねらったのであります。

○妙信講はこの訓諭発布以後五日間にわたり、七回宗門を中たて、学会と激論し、合意書を作成し、その結果、学会は聖教新聞に

○『正本堂はなお未だ三大秘法抄・一期弘法抄の戒壇の完結ではない』との見解を発表した。

○この時期、私は法道院へ在勤したばかりであったが、浅井親子と早瀬・阿部（時によって藤本）の会談の隣室でのオープンリールでの録音（いつ果てるか分からない一時二時過迄の話し合い）役であった。食事もせず、御茶を出すのも憚られるような状況であった。会談が終れば阿部は泊り、朝早く二人して大石寺へ行くという繰り返しであった。私の係の日、夜番として勤め、暗くなった本堂の玄関に早瀬・阿部が浅井親子を送って本堂横の廊下をもどって来る時、

早瀬『教学部長、俺達は将来、宗門の人間の強い者になるんじゃないかなあ——』

阿部『何言ってるんですか、総監さんがそんなこと言ってるんですか！』

この早瀬の慨嘆に満ちた言葉と、阿部の『ここまで来

たら、恥をかくのはいやだ、つっぱしるだけだ」との迷いのない叱責の言葉を、聞くとはなしに、役を終えて所化部屋の入り口で聞いた時には、まさに、「純粹な法門の話ではなく、政治だなあ」とつくづく思ったものでした。

○聖教新聞に載せることになった、

「正本堂はなお未だ三大秘法抄・一期弘法抄の戒壇の完結ではない」

との主旨の文章は、まさに学会にとっては恥辱にほかならない。学会は教義よりも功績と自分達思想が主で、あとは皆、従でしかなかった。

○しかし、妙信講は、この押し込んだ勢いで、我等に流れば来たりとし、もう一步、自分達の考える御遺命守護迄行って行って全てを粉碎せんとし、もう一度何とかウヤムヤにしようとする学会に対して、公場対決を望む。教義の正面对決に弱い学会は、貫首をかくれ蓑に逃げる。

○宗務院は、内容はともかく、なにしろ近づく正本堂完成の前に穩便に穩便にと「訓諭」に従い、信者同士争うことなく公場対決を撤回するようにと、妙信講に書状で求める。

○学会も公場対決拒否の返事をする。

○妙信講は日達上人との直接会談を五月十日に望み拒否される。

○五月二十六日、妙信講幹部總會開催。

①「訓諭」に従うことは出来ない。

②「公場対決」も撤回しない。

③今後も解散除名覚悟で「御遺命守護の斗い」を続ける。

この三項目を宣言し、これを印刷し、全国の僧侶、学会員宅への文書配布活動を始める。

○これに対し、学会は宗門に苦情を申し立てる。

○宗門は文書配布活動の中止と①②③の撤回を要求すると共に処分を匂わせながら通告する。

○六月十二日、宗門はやつと阿部信雄著「国立戒壇の誤りについて」という、赤を基調とした太陽を圖案化した(通称赤本と呼ばれる)七六頁の小冊子を発行し、今迄の妙信講懐柔策、裏取りきの駆引きから、一応宗門の当事者自身が表舞台に出て、国立戒壇を破折した。しかし「国の建築許可書を、勅宣並御教書と考える」等と、最初から辻褃合わせの、「はじめに学会よりの答えありき」の内容で、僧侶全体からも、輕薄で

あり、根本教義から出発した論文ではない、学会まるがかえの御用数学であるとの感想を持たれ、信頼を得、共感を持って迎えらるることはなかつた。その為、この本の内容では、今迄の強引な主張とボタンの掛違いを糊塗するだけでなんの改善にもならなかつた。(一九九二年初頭よりの宗門と学会の争いの中で、阿部は正本堂の戒壇問題が根底の主原因のように言い出して来たけれども、自分自身がそのことに主なる役割を果たして来たことを忘れ、まったく節度反省のない人間であることを露呈した)

○妙信講はどこまでも①②③を主張した為、宗務院は妙信講を処分するか、「訓諭」を否定、訂正するかのどちらかを選択しなければならなくなり、この混乱の中で、早瀬総監と、「国立戒壇論の誤りについて」を書いた当事者の阿部数学部長が、日達上人との「意見の相違のきしみ」の中で、手に手を取って、責任放棄と考える拗ね方で、六月の末、辞表を提出し居所を届けぬまま出弄することとなった。

このことは、学会を無視出来ない。重要視しなければならぬ。学会の言い分を中心に、なんとか辻褃を合わせて事態の終結を計りたい。その為には手段を選

ばず妙信講を強硬に処分しようとする、早瀬・阿部を中心とする宗務院の考え方と、一方日達上人の、妙信講の言い分も、全ては退け難く、学会の独断専行を完全に赦さず、玉虫色でも巧みな結着をつけて、貫首の権威を守り、貫首中心主義の路線をより強く築きたいとする思惑が交錯して、朝令暮改となったり、小細工をする為、自己保身から責任のなすりつけ合いになり、言った言わない、おまえが弱腰だからということになり、御互いが不信感を募らせ、亀裂を生じ、貫首と早瀬・阿部の間に疑心暗鬼の感情が倍增していったのであります。しかし、それもこれも、彼等は出発に、法門の定見を持っていなかった為、全てを政治的に納めようと考へた結果がこうなっただけのことなのであります。

その後この辞表は撤回され、以後全ては貫首の直接交渉によって貫首の御手並拜見という状態になってしまったのであります。

○七月一日、松本日仁を本山に呼び「訓諭に従うように」との妙信講への親書を手渡す。

○七月四日、「訓諭には従えぬ」返書が、妙信講から貫首へ。

○同時に妙信講は全ての寺院住職に直接談判を申し込む行動を開始。

○七月五日、妙信講青年部が池田大作宛に抗議文を送り公場対決の主張を再びする。

○終息を目的に思っていたことが再燃になってしまい、驚いた貫首は、七月六日辞世の句を残して、妙縁寺に趣き、浅井親子と面談し、

○「訓論については不本意な箇所があるので、全宗門に誤解なきよう近々新しい解釈を『大日蓮』に載せる」と述べ、浅井親子が、

○「創価学会の『聖教新聞』に連載されている、阿部信雄著述の『国立戒壇の誤りについて』の連載中止を要望。」

これを貫首は受け入れる。

○七月八日、中止。

(つまり赤本は、学会の考え方に丸がかえされ、学会の考え方をより一層バックアップする為に作られた御用数学本であったことが明確になった。)

○七月十九日、貫首は浅井親子、松本日仁を本山に呼んだ。『大日蓮』八月号に掲載予定の訓論の新解釈の原稿が出来、浅井親子の意見を入れる為、三箇所にとわ

て、貫首自ら、加筆訂正を行なった。

○この箇所は、妙信講側の主張によれば、訓論の「正本堂は広宣流布の暁に本門寺の戒壇たるべき大殿堂なり」

の部分を実質的に否定、訂正するものとなったというのであります。(暁に立つものが前に立っているという考え自体が限りなく誤に近い玉虫色と言われても仕方がないものであります。密室であり、妙信講側の主張といっても、前後の状況からして、妙信講の主張に誤りはないと思える。)

○妙信講はこれを受けて、すぐ様『富士』八月号に、「狛下、妙縁寺に御下向、御指南給う、訓論はやはり御本意にあらず」

との講演速記文を載せ、又宗門に配布した。

○八月十二日、貫首再び妙縁寺にて、松本日仁、浅井親子と面談。

「先日言ったことは全部取り消します。残念ながら、(訂正を)『大日蓮』誌に載せることは出来ない。もう私にはどうにもならない。どうか直接太会と話し合っ

て解決して下さい」と語る。
妙信講が望む学会との「公場対決」は、信者同士の

混乱を招き、そして法門の裁定をしなければならぬ
本山貫首の責任放棄の醜態露呈になる為、させたくない。
い。

大石寺、貫首の權威は守りたい。

審判役、裁判長役の貫首が、少々の間違いがあつても、俗が權威に屈伏する僧俗關係を作りたない（もちろんこれは本当の大石寺法門の考え方ではない）。しかし、学会からは、今日迄の功績をすこまれ、妙信講からは、今日迄宗門の伝統教義とされて来た教義解釈の上から矛盾を突かれ、ボタンの掛違ひは、後戻りのきかない状態となつてしまつた。

全ては経営と政治的方針を優先し、法門という柱を大切にしないで、常じ場当りのムードでやって来た付けが廻つて来たのであります。

以上が、「奥付・昭和四十七年七月二十日」前後の妙信講問題の流れであります。

※付記

かといつて私は、妙信講の国立戒壇論が正しいとは思いません。

日蓮大聖人の仏法の最高の目的は、一切衆生成仏であ

ります。国立戒壇が一番の目的ではなく、道のりの目的であり、当時の国家観からする時、一國広布の証としての目的であります。

又、本門の本尊、題目の三秘も各別して論じられるものでなく、もともと三秘一体にして本尊に即するものがあります。

今日の政治形体、とりわけ民主主義をどう考えるか、天皇制並びに天皇をどう考えるか、鎌倉時代の武家政治を理想と考えるのか、世界宗教としての富士法門の展開をどう考えるのか、人口のどれだけでもって国立と考えるのか、鎌倉時代と違う世界観にどう対応するのか、日本だけの国立でいいのか、挙げればまだまだあると思ひます。

広宣流布と一切衆生成仏とは同じイコールのものであります。私は、妙信講の主張する広宣流布観のベースは、学会と同じで、信仰者の世帯数増加と世界制覇によって成り立つという考え、その精華として国立戒壇があると考へているように思へてならないのであります。

己心の胸中の肉団に三秘相即の本尊を建立し、同時に胸中に戒壇を建立する。目に見える国立戒壇よりも、実はこの戒壇の方が重要であり前提でなくてはならないの